

YOKOHAMA SOLISTEN



2013年5月2日(木) 横浜みなとみらい小ホール



Program

ベートーヴェン「プロメテウスの創造物」序曲
グノー「9つの管楽器のための小交響曲」

—休憩—

ベートーヴェン「交響曲第7番」



本日はご多忙の折、横浜ゾリステン～指揮者のいないオーケストラ～2013年春公演にご来場くださり誠にありがとうございます。団を代表し厚く御礼申し上げます。

横浜ゾリステンは2009年秋に結成されたプロフェッショナル・オーケストラです。同年11月にベートーヴェン「運命」でデビュー以降、年2回の公演活動を中心に、アンサンブル重視の演奏活動を続けてまいりました。昨年12月26日には鎌倉ジュニアオーケストラ主催により、ジュニアの方々とドヴォルザーク交響曲第9番「新世界より」を共演するに至りました。皆様方の暖かいご支援あつてのことと心より感謝申し上げます。

さて、今宵はおなじみのベートーヴェン交響曲第7番他です。指揮者を置かないアンサンブルで挑みます。お楽しみいただければ幸いです。横浜ゾリステンは常に高度なアンサンブルによる質の高い音楽をお届けできるよう、今後も活動を進めてまいります。引き続きよろしく願い申し上げます。

次回公演は平成25年11月、ヴァイオリニスト鷺見恵理子氏をお迎えして共演を予定しています。詳細は5月中に横浜ゾリステンホームページにて案内いたします。次回公演も合わせてよろしく願いいたします。

横浜ゾリステン事務局長 住田英二

◆横浜ゾリスデン～コンサートミストレス



田島華乃

1986年、2月生まれ。

3歳半よりピアノ、4歳よりヴァイオリンを始める。

桐朋女子高等学校音楽科（男女共学）を経て、桐朋学園大学音楽学部を卒業。

これまでに、石橋敦子、江口有香、小林健次の各氏に師事。

ザルツブルク音楽祭で、E・シュミューダークラス受講。ファイナルコンサートに出演。

第44回小野アンナ記念会に出演

全日本芸術音楽コンクール第二位

子育てママの心ほっこり！「かもめ音楽館」代表として、出張演奏企画・活動をしている。

◆横浜ゾリスデン～メンバー

フルート	長崎 亜星 小津 まゆみ	ヴァイオリン	田島 華乃 土谷 茉莉子
オーボエ	中山 正瑠 荒井 豪		田代 藍 井神 麻友子
クラリネット	木原 亜土 宮前 和美		佐藤恵梨奈 竹之内 悠
ファゴット	河崎 聡 柿沼 麻美		渡邊 友季子 高岸 卓人
トランペット	金城 和美 原 育海		松田 彩 松谷 萌江
ホルン	安田 健太 大出 佳子 二宮 聡美	ヴィオラ	武石 侑子 舘泉 礼一 平野 幸世 宇野 友里亜
		チェロ	関口 将史 苅田 鉄平 山田 健史 和田 理
		コントラバス	早川 珠実 吉本 宗司
		ティンパニ	清田 裕里江

◆Program note

『プロメテウスの創造物』（Die Geschöpfe des Prometheus） 作品 43

ベートーヴェンは生涯で2作のバレエ音楽を振付師のサルヴァトーレ・ヴィガノーの協力によって作曲している。この「プロメテウスの創造物」は1800年から1801年にかけて作曲された。同年の3月23日にウィーンのホーフブルク劇場で初演され、好評を博したと伝えられている。しかし現在は序曲以外ほとんど演奏されることはない。

ベートーヴェンはこのバレエをドラマと舞踊と音楽の緊密な結びつきを実現しようとしていた。そしてこの音楽は、当時既に詩人ゲーテとシラーのあいだで論議され一種の「総合芸術作品」としての趣をもつ例となった。

『9つの管楽器のための小交響曲』（Petite Symphonie pour 9 instruments à vent）

シャルル・グノーが1885年に作曲した管楽合奏のための作品。初演は1885年4月30日にサル・プレイエルで管楽器室内楽協会により行われた。グノーは30歳のときに古典的な楽器編成と楽曲構成で作曲した、管弦楽のための2つの交響曲を残しているが、一方こちらの作品は交響曲とは銘打たれてはいるものの、フルート（1）、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴット（各2）のための室内楽曲にほかならない。楽曲構成の薄さや規模の小ささから、20世紀における「シンフォニエッタ」や「室内交響曲」の先駆的作品となっている。グノーが楽長を務めていたサン・トゥスタッシュ教会の聖歌隊に、後に画家として著名になるピエール＝オーギュスト・ルノワールが1850年頃から数年間所属していた事がある。グノーはルノワールに声楽を教え、ルノワールの歌手としての才能を高く評価していた。そのためグノーはルノワールの両親にルノワールをオペラ座の合唱団に入れることを提案したが、断られた。グノーはルノワールを歌手にしようと考えていたので、その才能を惜しんだ。

『交響曲第7番』 イ長調 作品 92

ベートーヴェンの交響曲中でも最もリズムカルな作品である。第5番や第6番におけるさまざまな新たな試みの後に再び正統的な手法による交響曲に回帰した作品である。

音楽家からの評価はさまざまである。ワーグナーは各楽章におけるリズム動機の活用を指して、この曲を「舞踏の聖化」と絶賛している。その一方で、ウェーバーは「ベートーヴェンは今や精神病院行きだ」との言葉を残し、ワインガルトナーは「他のいかなる曲よりも精神的疲労を生じさせる」と語っている。

作曲は1811年から1812年にかけて行われ、初演は、1813年12月8日、ウィーンにて、ベートーヴェン自身の指揮で行われた。同じ演奏会で初演された『ウェリントンの勝利』の方が聴衆の受けはよかったとされるが、それでも初演は成功であり第2楽章はアンコールを求められた。